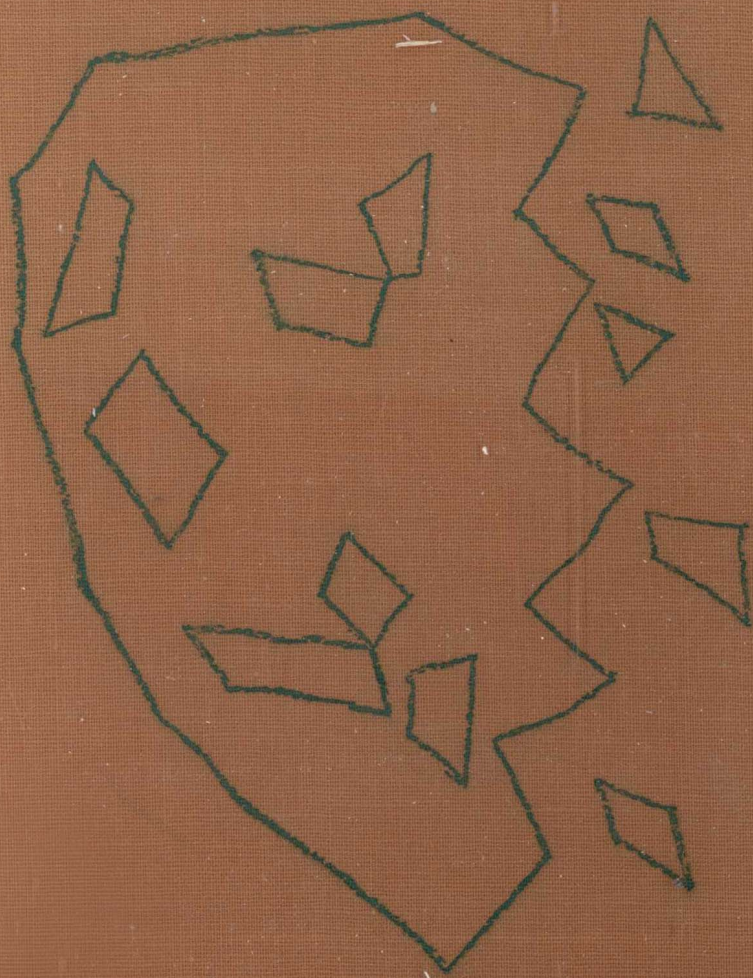


玻璃物語 双蛇宮



玻璃物語

双蛇宮

玻璃物語

昭和六十二年六月二十日 初版発行

著者 双蛇宮

装訂 早川良雄

発行者 佐藤今朝夫

発行所 国書刊行会

定価 二五〇〇円

〒一七〇 東京都豊島区巣鴨二一五―一八
電話 (九一七) 八二八七 振替東京五六一六五二〇九
印刷 セイユウ写真印刷株式会社
製本 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えます。

第一章

凝固

9

空木の上

桔梗

茜

菊

楓

旭

大納言 橘義高

貴子

権中納言

絵師良達

阿闍梨

さぬき

第二章

異化

たかお爺や

北の方（姉小路）

啞の少年

比丘尼

青い眼の青年

金色の眼の娘

孔雀院

土御門典明

司の長官

男

冴女

二人の子供

侏儒

大領

巫女

放免

九人の役夫
（やくふ）

第三章
燦爛
（さんらん）

139

孔雀院

土御門典明

絵師良達

桔梗

土御門竜明
（りゅうめい）

島尾

盧珪
（ろけい）

玉蘭
（ぎよくらん）

李西鳳
（りさいほう）

亮
（りょう）

赤い眼の老人

仙人を望んだ男

玻璃物語
HALLUSION

憧れがひとを連れ去るところ、
そこにはひとは誰もいないのだよ……。

トーマス・マン

プロローグ

それは青い光の粒だった。前世と現世、来世をめくるめくようにあつめた青い透きとおった光の粒だった。成就されないまま吐息のようにこの世にのこされていった無数の憧れをはらんで、それは宇宙の闇をしずかに漂っていた。そして初夏のある日、報われぬ烈しい憧れを抱くひとりの女が、その光の粒を受胎した。光はその女の腹を膨らませて、やがて青く硬く凝固していった……。

第一章 凝 固

一

暗い碧緑と鬱金色の波頭をたて、深い群青色の波がうねり荒れている海へ、いままさに岩崖から身を躍らそうとしている薄幸の姫君の絵姿におおいかぶさるようにして、六条万里小路の絵師良達は、姫君の唇の上に絵筆で紅を刷っていた。

「お父様」

背後からの声に、良達は筆をとめ、顔をあげた。

「桔梗か」

「はい、お父様。お呼びでございますか」

良達は、絵巻のなかで輪廻転生を繰り返し不幸な恋のみちすじをたどっている姫君の姿をみつめ、言った。

「桔梗。おまえ、お屋敷にあがってみる気はあるか？」

「お屋敷？」

良達は振り向いて、桔梗を見た。

「どうだ？」

「あの、どちらの？」

「三条西京極の権中納言さまのお屋敷だ」

「それでは、空木の上さま……」

良達はうなずいた。

「お付きの旭さまが今朝うちへいらっしゃっての、おまえをぜひにと、おっしゃるのだ」

桔梗は首をかしげた。

「でも、どうしてわたしを」

良達は紺色の葵え烏帽子をかむった頭を振りながら、下唇を噛んで言った。

「一度、おまえがわしのかわりに絵巻を持参いたしたであろう」

「ええ」

「その時、旭さまがおまえのことを気に止められて、空木の上さまにおっしゃられたそうなのだ」

「わたしのことを？　でも、なんと？」

「当節、珍しく明るい娘と……」

桔梗はふつくらとしたほほを赤く染めて笑った。良達は娘とは似ても似つかぬ瘦せた細い顎をしゃくった。

「ふ、それは良いが、お召しになるとはな。わしはいったんお断りしたのだ。ごひいきにしていただけのは、まことに嬉しく存じあげますが、なにせ、作法も何も知らぬ娘ゆえ、おそばに上がれば、きつとなに

かいたらぬことをいたしまして、ご迷惑をおかけすることになりましょうと」

「まあ、お父様」

「ところが、旭さまはぜひひにと言われて、わしの言葉を聞いてくださらぬのだ」

「で、お父様はどうなされたのです？」

「本人にたずねてから、と逃げた」

桔梗は微笑んだ。

「どうもこの話にはわしは気がすすまないのだ。ありがたい話にはちがいなからうが、おまえがあの屋敷に行くのが、妙に心にひっかかったの」

「まあ、なぜでござりましょう？」

「さあて、わしにもなぜかはわからぬ。ただ、空木の上さまは産み月を間近にひかえておられる。そんな大事の時を選んでわざわざ行くのはな。無事お産まれになればよいが、もしも万が一難産にでもなったりしたら、それこそ大変だ。それに……」

「それに？」

「そんなことはあるまいと思うが、大切なおまえを憑坐ようまになんぞされたら、かなわんからな」

「まあ、わたしが、空木の上さまの憑坐に」

桔梗はふたたび朗らかに笑った。

「笑いごとではないぞ。お産の時とはかく大事が起きる。おまえの母にしてからが、おまえを産んで、すぐみまかってしまった。男手ひとつで、ここまでおまえを育てるのは、並大抵の苦勞ではなかったのだぞ。とにかく、わしは、三条のお屋敷にはたいそう恩義を受けてはいるが、この話お断りするつもりだ。いいな、

桔梗。それがおまえにとつて一番いいと思うから、わしは断るのだぞ」

良達は朱色の絵筆の先を嘗^なめて、ひとりうなずき言った。桔梗はそうした父親をしばらく見ていたが、膝でにじり寄って、父親の脇に坐りこむと、絵巻をのぞきこんで尋ねた。

「空木の上さまは、そんなにもお美しいかたでござりまするか？」

「空木の上さまか？」

良達はふたたび絵巻の姫君におおいかぶさるようにして、風にひるがえつてめくれている桂^{くわいぎ}に、唇と同じあざやかな紅を刷いた。そして、体を起こすと、やや表情を固くして言った。

「そうだな……。いまこの都であれほどのかたがいらっしやるかどうか。あの、なよ竹物語の、丹精こめて描かれた姫君がそのままこの世に現れてきたようなお姿をしていらっしやる」

良達はそう言いながら、つい今しがた唇と桂に刷いたばかりの紅が奇妙な効果をもたらしたことに、目のみはった。風の吹きすさぶ岩崖の上で、おのが運命を深い海の底に見さだめんとする姫君の貌^{かお}には、良達の意匠に反して、恍惚の微笑が浮かんでいたのだ。さらに風にひらひらと舞い狂う血の色のような桂と、それにまつわりうねる黒髪との見事な色の対比が、悲しみの姫君を至福の天女とも見まがうほどに華やがせていたのである。

自分の絵筆がもたらした予期せぬ効果に、良達はかすかにとまどいを覚えながら、ひとりごちた。

「しかし、絵師のわしから言わせれば、あの美しさはあまりにも不吉だ」

父親の言葉にじつと聴き入っていた桔梗は、ふいに明るい声で言った。

「お父様」

良達はびくつきとして、桔梗の顔を見た。

「わたし、参ります」

「なに」

「わたしも空木の上さまにお逢いしてみたいのです」

桔梗は頬を染めた。

「心配いりませぬ。お父様。桔梗は、お父様がお考えになっていらつしやるほど、愚かではありませぬ。もし、不都合なことが出来しゅつた来しそうになりましたら、あわてて逃げ帰ってきます。だから、ご安心なさりませ、お父様」

良達はかすかにうなつて、なにか淡い夢を抱いているような様子の桔梗を不安げに見つめた。

二

桜の花びらがいちめんに散り落ちてゐる庭に面した廊下を通り抜け、北の対屋たのやへ続く渡殿わとどのに出ると、産所にしつらえられてゐる真つ白な御簾みすが見えた。安産を祈願して、誦經ずきやうする侍女たちの声もそこから流れ聞こえてきた。

「さ、こちらじゃ」

先に立つて歩いてゐた旭が言った。桔梗はうなずいて、その後に従った。御簾の前まで来ると、旭はひざまずき、うやうやしく言った。

「もし、お方さま。旭でござりまする」

簾すだれが上がり、桔梗はひれ伏して膝をすすめた。その時、白一色でおおわれた産所がちらりと見えた。白しろ

綾縁の畳が五帖敷き詰められ、四方が真つ白い几帳でかこまれた産所には、中央に空木の上の白い茵があり、そのかたわらには白装束の数人の侍女がはべっていた。

「お方さま。絵師良達の娘、桔梗を連れて参りました」

「桔梗でございます」

桔梗は深く頭をさげてかしくまった。すると、玲瓏としたひびきの中に、ふしぎなあまやかさをふくんだ声が出た。

「顔を見せておくれでないか」

「さ、お方さまのおっしゃるとおりになさりませ」

旭にうながされ、桔梗はおそるおそる顔をあげた。と、精巧な鑿でけずられた白瑪瑙のような顔ばせに、桔梗が一瞬息をのまれていると、空木の上が微笑して言った。

「桃のようなほほをしておる」

桔梗はあわてて応えた。

「はい。父もそう申しまして、よくわたくしのほほをかじりましてございます。ある時などは、わたくしの姿を写すと言って、寶子の上に坐らせ、桃の絵を描いたこともございました」

旭が桔梗の袖をひいて小声で言った。

「そのようなことは言わずともよいのじゃ」

空木の上が切れ長の涼しい眼で旭を見た。

「よい、よい、旭。それにもしや、その絵はこの屋敷にある桃の絵かも知れぬ。このように美味しそうな桃